紙つぶて

オペラの花

武田　好

オペラの花といえば、ヴェルディ作曲の『椿姫（ラ・トラヴィアータ）』。主人公ヴィオレッタ（小さなスミレの意）は胸に白い椿の花を飾り、月に一度、それが赤に替わる。愛を告白するアルフレードに心動かされた彼女は白い椿の花を渡す。

マスカーニ作曲の『カヴァレリア・ルスティカーナ』では畑仕事の女たちが復活祭の日に、オレンジの花が香り、ミルトの花が咲く春の訪れを歓ぶ。

プッチーニ作曲の『蝶々夫人』で、蝶々さんは米海軍士官ピンカートンからバーベナ（美女桜）の香りと呼ばれる。三年ぶりの再会を待つ彼女は桃、スミレ、ジャスミン、バラ、バーベナ…をまき部屋を飾る。

ご存じルネサンス絵画の傑作ボッティチェッリの『春（ラ・プリマヴェーラ）』は、オレンジの木に囲まれた庭のような空間。中央に立つビーナスの後ろには愛のシンボルのミルトの木、足元にはスミレ、バラ、忘れな草、ムスカリ、矢車草、アイリス、アネモネ、ラナンキュラスなど四十種類もの花が一面に描かれている。約三十種類は特定できるそうだが、椿は見当たらない。日本原産の椿が欧州にもたらされるのは大航海時代以降のことである。

さて、チレア作曲の『アドリアーナ・ルクブルール』で、アドリアーナはスミレの花束を受け取る。花に唇寄せた彼女は、仕込まれていた毒によって息絶える。花の意図はかくも怖い。

（静岡文化芸術大教授）

2020.4.11

2020.4.11
中日新聞（夕刊）P.1